



病院図書室の業務分析 (第1報) —図書室担当者の専門性は生かされているか—

中村 友紀

I. はじめに

われわれはこの度、近畿病院図書室協議会の活動の一環として、研究助成金による研究グループを作り、病院図書館・図書室（以下“病院図書室”）司書および担当者の業務と業務量の調査・分析を行った。今回はその中間報告ということで「第1報」と題し、アンケートの結果を中心に報告したい。

現在、病院図書室担当者の雇用条件は、厳しい条件下に置かれている。平成17年度の当協議会年次統計では、司書の有資格者は約50%を示しているが、有資格者であっても派遣・パートなどの非常勤の職員であったり、また常勤職員であっても診療情報管理士や医局秘書、事務職などと兼務であったりする機関は多いかと思われる。

司書として、また病院図書室担当者としての専門性が、管理者層に果たして認識されているのか、また日常業務の中でその専門性が生かされているのかなどについて調査を行い、もし生かされていないとすれば制約している因子とは何なのか、管理者層の図書室業務への認識を高めるにはどうすればよいのかを考察したい。

II. 調査方法

当協議会の平成15年度年次統計から、図書室業務にかかわる設問に詳細な回答例を設定したアンケートを作成。平成15年度年次統計調査に



回答し、かつ平成17年度に在籍していた78機関を調査対象とした。回答率69%（54機関）。

III. 調査結果(1)—司書の専門性

1. 図書委員会

図書委員会に図書室担当者が「不参加」、あるいは恐らく図書委員会がないと思われる「記入なし」と回答した機関が合わせて35%を占めた。図書室をよりよく運営していくために、また各施設での適切な図書配置のためには図書室担当者の意見は欠かせない。ぜひ担当者からも積極的に図書委員会に参加できるようにしていただきたい。

2. 資料収集の選択

約半数が何らかの形で選択に「加わっている」と回答。また、「直接選択には加わっていないが、医師が選択した上で図書委員会にて審議する」と回答した機関もあり、最初の図書委員会に関する設問とを照らし合わせて考えると、資料の収集に関しては、ある程度担当者が図書室のよりよい整備に貢献できているのではないかと

と考えられる。

3. 辞書・統計書・ハンドブックの所蔵

過半数の機関が「図書室担当者による選書はできない」と回答。視聴覚資料についてもほぼ同様の結果であった。各科の医師による選書では、辞書や統計書などの一般職員も利用する図書は含まれない。これらの資料に対して、利用者が満足しているか否かは、利用状況を把握できる図書室担当者にしかわからないし、また蔵書構築を考える上でも担当者が選書に参加すべきではないだろうか。決定はできなくとも、蔵書構成や利用面から必要な資料を選んだり、提案したりすることで選書にかかわることは重要である。そして、できればわずかでも別枠で図書室の常備図書用としての予算が欲しいところである。

4. オンラインジャーナルの利用、図書の分類

「オンラインジャーナルを利用している」と回答した機関は半数を超えているが、この中には冊子購読についてくる with 版のみを利用している機関も含まれている。図書の分類については、回答機関の92%が行っていた。利用者が必要な資料を探しやすくするためには、図書の分類は必須である。また図書を利用しやすいか否かは、図書室と担当者の評価にもつながるのではないと思われる。

5. 雑誌の保存・廃棄基準

和洋雑誌の保存と廃棄基準については、表1のような結果になっている。小規模でスペース

が限られている場合が多い病院図書室では、雑誌のバックナンバーの廃棄と別置はやむを得ない問題であり、頭を抱えている担当者も多いかと思われる。しかし、廃棄した資料でも利用者が必要な時には提供できるサービスの体制ができていれば良いと思う。そしてこの体制を整えることも、図書室担当者の専門性の1つではないだろうか。

6. 患者への図書サービス

患者への図書サービスは、最近新聞記事などでもよく取り上げられている項目である。図書室担当者からの意欲的な取り組み姿勢もさることながら、病院機能評価の影響も大きいようで、トップダウン的に導入されている機関も見受けられる。今回のアンケートでは、24%が「患者への図書サービスは行っているが無関係である」と回答し、31%は「施設自体がサービスを行っていない」と回答している。

「その他」に分類した回答の例として、「各フロアにて書籍サービスを行っている」「病棟に図書棚を設置している」「外来・病棟に患者向け図書を置いている」などの回答があった。「患者図書サービス」と一口にいっても施設によってさまざまな解釈があるようだ。

また、54機関からの回答中だと大変少ない数ではあるが、サービスをしたいが毎日の業務に追われているなどの理由で、「始めることがかなわない」と回答している機関が存在することを重要視したい。担当者にその意思があるにもかかわらず、サービスが提供できないということは非常に残念なことである。患者への医学情報の提供は、今後の病院図書室担当者の新たな活躍の場であると思われる。業務の優先順位を考慮しつつ、このサービスにも積極的に関与していきたい。

表1.

■雑誌の保存(廃棄基準について)			
●和雑誌		●洋雑誌	
利用統計(状況)を参考にする	2	利用統計(状況)を参考にする	2
蔵書構成を考慮	4	蔵書構成を考慮	4
一定の基準	27	一定の基準	26
複数回答	3	複数回答	2
記入なし	18	記入なし	20

IV. 調査結果(2)―図書室業務の専門性

1. 業者を利用しているか否か

文献相互貸借について、「未所蔵文献の手配サービスを業者に依頼している」と回答した機

関は、全体の16%であった。ただし「いいえ」と回答した機関の中には、「どうしても見つからない場合に限って業者を利用している」「他施設への依頼と併用している」といった回答も若干含まれている。

2. 業者を利用せずに他施設への依頼を行っている場合

書誌事項の確認について、「大変だ」との回答がゼロだったことは、二次資料の電子化によるところが大きいのではないだろうか。また「やや大変だ」という回答に関しては、インターネット接続の問題や依頼件数の他、参考文献からの依頼の場合は書誌事項にミスがあることが多く、確認をする必要も多々あることが関係しているためと思われる。最近 Ver. 4 にバージョンアップした医中誌 Web には、書誌確認の機能が近々実装されることになっているので、より便利になるのではないだろうか。

オンラインジャーナルで入手可能かどうかの確認については、約63%が「大変だ」、あるいは「やや大変だ」と回答している。これは、インターネット接続の問題の他、担当者の英文読解力も関与しているのではないだろうか。問題と照らし合わせて、次報以降で報告できればと考えている。

入手先の選定については、67%が「大変だ」、「やや大変だ」と回答。これは特に依頼数が多い場合に依頼先の負担を考慮する、という担当者の配慮がなされていることが原因の大部分であろう。一方で、「やや楽だ」という23%の回答には、目録を CD-ROM 化した効果が表れているのではないだろうか。今後 Web 化され、どんどんアップデートされていくことで、少しでも担当者の負担が減ることを期待したい。

また目録の CD-ROM 化に伴って、依頼フォームが自動作成できるようになったことも、「やや楽だ」の回答に反映されているようにも思われる。一方、集計などの点から独自のフォームを使用している機関もあり、「やや大変だ」と「やや楽だ」がほぼ同数の回答であったのはそ

のためではないかと推測している。

FAX での依頼状送信については、過半数が「楽だ」ないし「やや楽だ」と回答している。今回のアンケートには、FAX と E-mail の受信環境の整備状況について尋ねる設問もあったが、FAX と E-mail ではわずかに FAX が上回った。このことは、インターネットを含めた通信環境が、図書室内にも整備されつつあることを示していると思われる。今後は FAX のみではなく、データを活用できるインターネットを利用した相互貸借を検討してもいい時期に来ているのではないだろうか。

支払い作業については、53%が「大変だ」「やや大変だ」と回答している。この項目は次報以降で「郵便振替」を利用している場合とそうでない場合とを比較して報告できればと考えている。

請求作業についてであるが、「到着・開封・依頼した本人への連絡」の項目にはなかった、「大変だ」の回答が3件あった。「やや楽だ」「楽だ」という回答の場合は、文献複写の代金が公費請求であることなどが考えられるが、このことについても次報以降での報告とさせていただきたい。

全体を通してみると、業者を利用している機関が16%に過ぎなかったにもかかわらず、「やや楽だ」「楽だ」の回答が予想以上に目立ったのが少し意外であった。文献複写依頼業務が他の図書室業務にあまり差し障りがなかったのか、それとも文献複写依頼が主な業務なのか、または依頼件数が少ないのか、これについても今後の追跡調査が必要かと思われる。

3. 他施設からの文献複写申し込みに応じている場合

一連の項目の中で、「大変だ」という回答があったのは「依頼件数」1件、「所蔵の確認」3件、「複写と発送までの手間」1件、「FAX 送付」4件だった。「依頼件数」については、その依頼量の多さを推し量ることができるし、「所蔵の確認」については、確認事項の個人差

や部署配置をしている、目録を整備していない、他部署と兼務であるなどの各図書室の事情が関係しているのではないかと考えられる。「複写と発送までの手間」については、依頼件数の他発送手続きをする場所と図書室が離れているなどの立地条件が関係しているのであろうか。また「FAX 送付」については「大変だ」の回答が一番多く寄せられたが、この最大の理由は図書室内に FAX が無いことではないかと推察される。それから「書誌事項の確認」について、「やや大変だ」の回答が11件あった。これは文献複写を依頼する側の責任なので、ぜひとも注意したい。

いずれもこれらの調査は、各作業について具体的に量、質についての検討項目をあえて加えず、図書室担当者がこの業務についてどう感じているかを知る目的で設問を作成したため、同一量でもその判定には個人差があるものと思われる。しかし、総じてこれらの一連の動作を図書室担当者がこんな風感じている、ということを理解していただき、今後の図書室業務の参考にしていただければ幸いである。

4. 利用指導・個人図書購入の斡旋

オリエンテーションなどの図書室利用指導については、72%の機関が「実施している」と回答している。特に臨床研修医に対しては、何らかの「オリエンテーションを行っている」とした回答が多く見られた。これは、臨床研修医採用時のオリエンテーションに組み込まれた利用指導というケースも多いのではないかと推察される。ちなみに、当院ではオリエンテーションを行っているのは臨床研修医のみだが、研修医は蔵書利用にしても文献相互貸借にしても、非常によく図書室を利用している。利用指導は単にその言葉通りの意味だけではなく、図書室の利用促進の観点からも大いに意義があると思われる。

また、職員の個人図書購入の斡旋については、図書室本来の業務ではないが、利用者の身近なサービスでもあり、さらに新刊や改訂版などの

出版状況についての情報提供もできれば、図書室の評価にもつながるのではないだろうか。

5. 業務報告

病院・施設の管理者に業務報告を行っているかどうかについても尋ねてみた。回答機関の半数が、何らかの形で業務報告を行っていると回答している。回答項目以外では、「図書委員会で報告した後、委員会議事録を管理者に回覧する」「毎年年度末に事務部長に報告する」「毎月行われる所属部署の連絡会で報告する」「業務内容を日報に記載している」「週1回自発的に報告している」などの回答が寄せられた。

業務報告は、院内の広報になるとともに、図書室の活動を知ってもらう有効な手段の1つである。「業務報告を行っていない」とした機関の大半がその理由を「義務づけられていないから」と回答しているが、義務づけられていない場合でも、図書室側から積極的に報告することがあっても良いのではないと思われる。

表 2.

■病院(施設)の管理者に業務報告を行っている。(はい:27、いいえ:26、記入なし:1)	
● 報告方法	
義務付けられている	1
院内広報誌に掲載	1
図書委員会で報告	9
義務+院内広報誌掲載	1
図書委員会で報告+院内広報誌掲載	3
図書委員会で報告+その他	7
その他	5

V. 考察・まとめ

今回は第1回目の報告ということで、図書室担当者と業務とのかかわりや図書室担当者として業務の中でどの程度専門性が生かされているかについて回答を求め、そのデータから推測を立てて、中間報告ということで発表した。

集計結果の全体を見渡すと、業務の体制は施設によって大きな差があることを改めて実感させられた。ただ、資料選択に何らかの形で図書室担当者が関与している機関の割合と、業務報

告を行っている機関の割合がほぼ一致したのは偶然であろうか。ちなみに、当協議会年次統計における司書有資格者の割合とも重なっている。ここには各施設（特に管理者）の図書室への意識がうっすらと透けているように思えてならない。

最初に病院図書室担当者の雇用条件が厳しいことについて触れたが、アンケートの回答やコメントを読み進めていくうち、そのような厳しい中でも担当者の方々が積極的に業務に取り組んでおられる姿勢がうかがえた。その姿勢を管理者に知ってもらうためにも、現在業務報告を行っていない担当者の方々は、ぜひ積極的に業務報告を行っていただきたい。雇用形態や勤務状況、上司や管理者の意向などで困難であるケースがあることは重々承知しているが、管理者に病院図書室の存在意義について理解してもらうためには、まず図書室担当者から積極的に動いて、図書室の業務内容についてできるだけ知ってもらえるよう努力をすることも大いに重要だと思うのである。

また、文献複写依頼業務が意外に負担になっていないという結果は少々予想外であったことが、回答集計直後のわれわれの一致した意見だった。

回答の集計中、「この設問はこういう風に尋ねればよかった」「これも設問に加えておけばよかった」と思った箇所もたくさんあり、現状ではあまり踏み込んだ分析や考察ができてはいないが、今回の発表が、少しでも皆さまの図書室業務の参考になれば幸いである。さらに今後も調査と研究を続け、次報ではよりよい報告をしたいと考えている。

最後になりましたが、アンケート依頼から回収期日までの期間が非常に短かったにもかかわらず、多くの機関にアンケートにご協力いただき、心からお礼申し上げます。本当にありがとうございました。今後もこの研究を継続していきたいと思っておりますので、またアンケートへのご回答をお願いするかと思いますが、何卒ご協力賜りますよう、よろしく願いいたします。